

おくうら夢のまちづくり協議会

## 住民・行政・団体が連携し

## 地域の課題解決に挑む

— 防災マップ・買い物支援・特産品づくり

五島市集落支援員 小嶋 久実子

### 地域課題解決に向け自主的な地域づくり組織を設立

福島島の北東部に位置する奥浦地区の人口は、昭和二五年に最多となる四三七五人を数えたが、令和二年三月末日現在では九八〇人（減少率約七八パーセント）となっている。

そのうちの四七・五パーセントが六五歳以上の高齢者であり、少子高齢化の進展が著しい。地区内には小学校、中学校が各一校、五島市役所出張所が一カ所あるものの、地域住民の生活環境の維持などが大きな課題となっている。

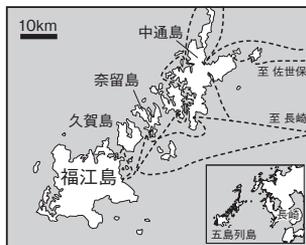
実際に「小売店がすべて廃業し、食料・日用品を地域内で揃えることができない」「バス路線がない地域では、車を運転できない高齢者などが通院や買い物といった日常生活に不便や不安を感じている」「若者が減り、伝統文化の継承や町内会の存続が難しい」「住民が地域の複数の役割

を兼務しており、会議などの過度な負担や非効率な事業活動を強いられている」といった声が挙がっていた。

これらの課題の解決に向け、町内会連合会や各種地域団体などによる「おくうら夢のまちづくり協議会（以下、協議会）」が、平成二五年一一月に設立された。翌年度からは、五島市の「地域の絆再生事業」のモデル地域として指定を受け、自主的なまちづくりが続けられている。

協議会の組織は、最高の意思決定機関である「総会」、全体の運営を行なう「役員会」、実際に活動する「部会」の大きく三つにより構成される。部会は現在、地域振興、防災、保健福祉、環境保全、体育文化の五つで取り組みが行なわれている。

設立当初の会員数は四四名だったが、平成三一年四月時点では九〇名を数えている。この要因として、加盟団体が



福島島：五島列島最大の島で、大部分が西海国立公園に指定されている。面積326.31km<sup>2</sup>、周囲320.3km、人口33,622人(令和2年3月末日現在)。北東部にある奥浦地区には13の集落が散在し、県指定有形文化財の堂崎天主堂が観光名所の1つとなっている。

増えたこと、その団体の役割として入会していた方々に任期の終了後もできる限り会員として残っていたら、地域づくりに携わってもらっていることが挙げられる。

### 地区内外の方々と協働で策定した基本構想

協議会は、市の交付金を活用しながら取り組みを始めた。しかし、当初は全体的な活動計画やビジョンがなかったため、それぞれの部会が単発的に事業をこなすだけだった。

そこで、「訪れたくなる・住みたくなる・住み続けることができる奥浦」の構築に向けた計画的な取り組みの推進や、住民ほか関係各

者が共有できる地域づくりの基本構想の策定を、住民や各種団体に加え、地域に関わるすべての方々と協働しながら行なった。ワークショップ形式の検討会議や大学生との意見交換などを通し、奥浦地区が目指す「まちづくり基本構想」が策定された。



大学生から地域課題解決に向けたアイデアや事業の提案を受ける。

検討会議では外部講師を招き、住民の皆さんとともに地域の分析や課題解決に向けた方策を協議した。大学生には、彼らの視点から奥浦地区の現状や地域の宝(資源)などを洗い出してもらい、これらを課題解決に活かすためのアイデアや事業を提案してもらった。検討会の結果をとりまとめ、まちづくりの将来像と具体的な取り組みは以下の通り。

・**地域振興部会**…「人口を維持するまち」を将来像に、五島市や観光団体と連携して体験型観光や民泊を充実させ、奥浦に訪れる人や短期滞在する人を増やし、民泊↓短期滞在↓定住へとつなげる。教会などの地域資源のマップを作成する。

・**防犯防災部会**…「つながり・安全・安心なまち」を将来像に、自主防災組織や地域住民と連携した防災マップを作成する。さまざまな団体と連携しながら安全で安心して暮らすことができる地区を目指し、交通安全教室や防災訓練を実施する。交通安全運動期間中は、毎朝立哨活動を行ない、児童生徒や車の運転者などに対して安全な通学・通勤に関する啓発活動を実施する。

・**保健福祉部会**…「長く元気に住み続けられるまち」を将来像に、高齢者(地域に支えられる側でもあり、地域を支える側でもある)一人ひとりが健康で生きがいを持って生活できるように、老人クラブや地域の活動、文化・スポーツなどへの参加機会を提供・支援する。高齢者の集いの場の設置や車の運転ができない買い物弱者への対策を行なう。

・環境保全部会…「誇れる美しいまち」を将来像に、奥浦地区の名所や風光明媚な景観の維持、充実などに向けた草刈りや清掃活動を行なう。

・体育文化部会…「地域を愛する人が育つまち」を将来像に、自然体験や親子ふれあい活動などを通じ、心豊かにたくましく学び、生きる子どもを地域全体で育む。生涯にわたって学ぶことができるまちづくりや地域の歴史資産の整備、案内板の設置を行なう。

### 防災マップづくりで災害意識を醸成

防犯防災部会が実施した具体的な事例として、住民自らが作成した地域の防災マップが挙げられる。このマップは、自分の生命と地域の安全を守るため、奥浦地区内の災害危険箇所、避難場所などの情報を整理することで、災害に対する事前の備えに役立てることを目的としている。掲載している主な情報は、危険箇所や避難場所、住民がとるべき行動（発災時の連絡方法、消火器やAEDの使い、方ほか）などである。

マップ作成にあたっては、部会議を年に七回開き、日本防災士会長崎県支部の担当者の指導を受けた。約三〇人の住民が実際に現地を見て回り、調査結果を地図に落とし、いき、危険箇所の写真を貼るとともに、安全のポイント、気づいた点などを付箋やシールで書き込んでいった。参加者からは「防災の観点から地域を見ると、身近にある水路

もじつは危険箇所となる。発見が多かった」などの意見が挙げられた。完成したマップは、住民自身に分かりやすく活用できるように集落ごとに区分けした上で、各家庭へ配布した。

平成二八年度には、学校（児童生徒と保護者、教職員）、町内会、老人介護施設、警察、消防団・消防署を参加団体とする防災

訓練を一地区で実施した。同三〇年度にも、市役所、社協、消防団・消防署、警察などの協力のもと二地区の町内会で訓練を行なった。訓練後には、「災害に備える心構えができた」「坂道や階段では、足の悪い方などに対する補助や誘導支援が必要」「早めの避難はもちろん、災害に応じた避難ルートを考えておく必要がある」との声が聞かれるなど、住民の防災意識の向上に一定の成果があったと考えている。

令和元年に台風の来襲により土砂崩れや水没が地区内で起こった。そこで、「(今回の)経験を活かして災害に備えよう!」をタイトルに、災害が起きた現場の状況をまとめ



住民の手による防災マップづくりの様子。



日用品を揃えるだけでなく、利用者の交流の場にもなっている買い物弱者支援事業。

## 高齢者の見守りにもつながる買い物弱者支援事業

た保存版の広報誌を発刊した。  
これらの取り組みだけで万全な防災体制が整うわけではないが、自分や家族の命を守るために、常日頃から避難場所・経路の確認、備蓄品の購入などを行なっていき、災害に強い地域にしていきたいと考えている。

保健福祉部会では、「店がなく食料や日用品を買うのに苦労する」「買い物にタクシーを使うため費用がかかる」「病院やミニデイサー

ビスへ行く手段がない」などの声を受け検討した結果、まず買い物弱者支援事業から取り組んだ。

平成二十七年四月から準備を始め、福祉施設、民生委員、町内会長などの協力を得ながら同年一〇月に宅配買い物支援をスタートした。事業内

容は、町内会長や民生委員らが住民から注文票を回収し、その後、地域にある福祉施設が木曜日までに業者へ発送。翌日の午後二時までに業者が福祉施設へ配達し、そこから町内会長らが各家庭へと宅配するというもの。翌二八年度は、試験期間として、国の補助金を活用し、無料での支援を行なった。当初の登録者は二三名で、毎週一〇名程度の利用があった。

その後、この事業は、月額五〇〇円の利用登録料と、協議会から福祉施設への年間二〇万円の委託料収入によって制度の維持が図られている。

買い物支援を行なっていくなかで、実際に商品を見て買いたいという声が多く寄せられた。そこで部会では、同じ五島列島の新上五島町で買い物送迎を行なっているスーパーへの視察を実施した。視察先のスーパーでは、平成二八年一月より買い物送迎バスを運行しており、スーパーを起点に週三回の無料送迎を行なっている。二九人乗りバスを使用し、運転手（交代制二名）はスーパーが雇用していた。バスには必ずボランティアの方が同乗し、住民の乗降や買った商品を家まで運ぶ手伝いをしている。視察ではバスが二往復したが、いずれも満席で利用者は大変喜んでいった。

この視察を基に民生委員が中心となり、平成二八年一月に、宅配サービス利用登録者を対象に無料で買い物送迎を試行。一四集落（当時）のうち五集落を運行し、一四名の方の利用があった。この結果を検証し、翌年一月から全

集落を対象に二週間に一回の試験運行が始まった。しかし、奥浦地区全域を回るには、終日運行を行なっても二日を要する。そこで、運転手は午前と午後の交代制とし、ボランティアも一人つけた。一月は二日間で二〇名、二月は同日数で二三名が利用した。

四月からは、毎月第一・三週の火・水曜日に買い物送迎を本格実施。送迎車は決まった時間に地区を回るので、予約の必要はなく、いずれのコースもスーパーで一時間ほどの買い物ができる。

この事業は、地元企業から賛同をいただき、物心両面の協力が得られた。安心して生活必需品を買い揃えることができることはもちろん、副次的な効果として、利用者の交流の場、引きこもりの解消、高齢者の見守りなどにもつながっている。利用者からは「とても便利で、地域の方と会話する場にもなっている」など、うれしい言葉をいただいている。

### 奥浦の歴史を活かした特産品づくり

地域振興部会では、平成二七年に奥浦にゆかりのある特産品づくりを始めた。文献を調べたところ「唐の国から修行を終えた弘法大師が帰路につく途中、奥浦湾で風待ちされ、お世話になった村人たちに持ち帰った大豆を分けてくださった」という記述をみつけた。

そこで、耕作放棄地を利用した大豆づくりと、少し時期

をずらして栽培できるそばづくりに着手し、翌年、一反の畑から栽培を始めた。

収穫後は、十割そばのそば打ち体験を企画し、平成三一年二月には豆腐づくり講習会も開催した。農業従事者の高齢化や後継者不足により、使用していない耕作放棄地を活用して欲しいと声がかかり、徐々に畑の面積も増えた。令和元年は大豆を一反、そばを二反栽培している。

しかし、専門的な知識や技術もなく、害虫や台風、水害の被害を受け、収穫も不安定であるため、今年、幻のそばづくりで有名な諫早市高来町へ伺い、栽培を行なう上でのポイントや注意点、使用している農機具などについて学んだ。視察先の畑は広大で、使用している農機具など奥浦地区との違いもあったが、参考にできる点も非常に多かった。この特産品づくりは、現役を引退されたシニアの方々の生きがいにもなっている。奥浦を誇るブランドが生まれる



耕作放棄地を利用した大豆づくり。



地域の方々が参加したそば打ち体験。

よう試行錯誤を繰り返していききたい。

前述の事業以外にも、地域資源案内看板設置や教会のイルミネーション、フラワールードの整備など交流人口の拡大に向けた取り組み（地域振興部会）、ナイター・ペタンク（金属製のボールを使った球技）のボールを使った球技大会、蛍鑑賞会、奥浦さるく（まち歩き）、

担をかけず、みんなで分担・協力していける体制づくりが急務である。

幸いにして、地域にはいろいろな得意分野をもった多様な人材がいると感じている。「きらり」と光る奥浦の人々を発掘し、個人の負担になりすぎないように周囲が支え、強制するのではなく、協力し合いながら活動できる仕組みを構築していきたい。また、自然・歴史・文化・くらしなど、奥浦の大切なものを活かすことで、地域の課題を解決しつつ、目標とする奥浦の将来像に向かって取り組んでいきたいと思う。

今後「まちづくりの主役としての「地域住民」、それを支援する「行政」、関係企業・団体などのパートナー」と連携しながら、奥浦地区の夢のまちづくりを推進していければと考えている。

## 人と人とのつながりを活かしたまちづくりを

どの地域でも同様だと思うが、事業を行なっていく上で、人材の確保が難しくなってきた。あまり特定の人に負

小中市民合同運動会の開催など地域の歴史や文化、スポーツに触れ郷土愛を育む事業（体育文化部会）、史跡・観光地などの環境整備（環境保全部会）、地域の安全安心のための立哨活動や街路灯の設置（防犯防災部会）など、各部会ではさまざまな活動が行なわれている。



小嶋久実子（こじまくみこ）

1971年、長崎県新上五島町（旧若松町）生まれ。2017年に五島市の集落支援員として奥浦出張所に配属。おくう夢のまちづくり協議会の事務局と担い手として、事業の運営・管理を行うほか、同協議会のコーディネーターも兼任。